第11回森町総合計画審議会議事概要（未定稿）

日　　時：平成18年11月13日（月）午後２時～３時45分

場　　所：町民生活センター　集会室

出席委員：鈴木奉会長、友田和副会長、太田委員、榊原委員、岩瀬委員、打田委員、奥宮委員、小倉委員、小野委員、川口委員、鈴木晃委員、鈴木光委員、友田委員、松井委員、山根委員

事 務 局：町長、助役、深見課長、杉山課長補佐、長野係長、福島主事、
静岡総研２名（石井主任研究員、澤田研究員）

１　開　会

２　会長挨拶

３　諮　問

町長から会長へ総合計画基本計画について諮問

４　議　事

（１）森町総合計画基本計画（諮問案）等について

＜資料に基づき事務局説明＞

＜意見・質疑応答等＞

会　長：　前回において、それぞれ意見を出していただいたが、今回の諮問案は、それらに対する対応も含まれたものになっている。先ほど、町長から審議会への諮問という形でボールを預かった訳だが、是非、委員の皆さん同士でもいろんな意見を出していただきたいと思う。これまで基本計画たたき台ということで、ご議論いただいているが、委員の皆さんの熱心なご意見を踏まえて、もっともっと充実したものにしていきたいと思う。今、事務局より説明していただいたが、皆さんの方からご意見なり、ご指摘があったらお受けしていきたいと思う。いかがでしょうか。

委　員：　協働まちづくり委員会の皆さんにいろいろと、たたき台に対する意見をいただき、前回報告させていただいた。その中には言葉の使い方とか、基本構

想ということで固まっており、変えられないというものもあった。総合計画とか協働とかの考え方、行財政改革の取組とか、農業振興、防災防犯の充実、いろいろ多くの意見がでたが、だいぶこの中に、網羅、反映されているのかなという感じがしている。今回のキャッチフレーズというか、「古きをいかして新しきを」というこの辺も、最初、「復古創新」という言葉が出て、これでは言葉が難しい、分かりやすいものにしようということで、こんな形になった訳であるが、基本的に我々が考えていたことも、この第一楽章、「先人の足跡を知り、未来を歩む」といったところに十分反映しているのかなと思う。とにかく、だいぶ私たちが提言してきた内容が盛り込まれている。ただ、これをいかに実行していくのかということが、私たちの責任ではないかと思う。先ほど「町並みと蔵展」のご案内をいただいたが、こういった活動が今、少しずつ立ち上がってきている。シャッター通りで、店が閉まっている中で「森のがぁんこや」ができたりと、そういったいろいろな活動が芽生えつつある。出来るだけそういった活動が育っていくような、そういう活動を我々自身が協力できるような体制をつくってやっていかないと、先ほど、あったように行政に言ったって行政には出来ないことがあるし、町民と町民、町民と行政とが手をつなぎあって、協力しあっていく体制が協働だと思うので、とにかく実現させるためには、少しでも身近なところの小さなことでもよいので、取り組む姿勢を、みんなが、町民一人ひとりが実行していかなくてはいけないと思う。

せっかく総合計画が出来ても、それが飾られているだけではいけないので、みんなが率先して出来るような体制づくり、そういうベースになるものをどこかで築き上げていく。また、立ち上がってきたものを育てていくことによって、ああやっぱりみんなでやればいいなという気持ちをみんながもってもらえればと思う。そういう気運を少し高めるようなことをこれからやっていかないといけないのかなと思う。「町並みと蔵展」なども第３回を迎える訳であるが、だんだん根付きつつある。こういうものを皆さんでもう少し協力して、もっともっと外から人が来て、わぁいいな、「ええら森町」というようなものがアピール出来るようなものを、我々もやっていきたいと思う。協働まちづくり委員会も広い地域の中から集まってもらっているので、会うたびにそういう話をしているが、今回もせっかくこの様な諮問案が出てきている訳であるから、それに対してまた持ち寄って、忘年会ではないが、そういった席を設けて、みんなで確認をしたいと思う。大変うまくまとめていただいたので、ありがたいと思う。

会　長：　いま委員が言われるとおりだと思う。せっかく作ったものが絵に描いた餅にならないように、ムードづくりをしながら実行していくといったことが大事だとあらためて思う。また、まちづくり委員会の皆さんも、是非その中核となって今後もやっていただきたいと思うし、委員の皆さん、それぞれの団体や分野等を代表して出ていただいているので、委員の皆さんもそういった形で実行していっていただければと思う。

委　員：　私の方からは協働についてのご意見を申し上げて、事務局のお考えをお聞きしたいと思う。先月この場所で、協働まちづくり委員会の委員の方からのご意見の中で、協働ということがわかりにくいということが出ていたが、まちづくり計画の一番大事なキーワードは、協働であると私は思っている。この計画の中にも、協働という言葉が何回も出てくる訳だが、協働というこの言葉は市町村合併によって使われ出した、非常になじみの薄い言葉なのかなと思っている。皆さん方もちょうどそんなところではないかなと思うが。

「協働とは何か、今、なぜ協働なのか」ということを町民に理解していただかないと、行政と町民とがともに進めるまちづくりというのは、進まないのではないかと感じる。たまたま、先般、新聞を見たら、「協働という理解が深まらず」という見出しで、論説というような形で載っていた。宮城県の栗原市という10町村が合併して誕生した市のようであるが、最後をちょっと読んでみると、「地域の課題解決には、市と住民が考え、協働で解決しなさいということなのに協働の具体的なプロセスを行政はきちんと示さず、住民は協働の理解が出来ず、協働のまちづくりは一層進んでいない」という記事があった。やはり協働というのは、住民サービスのようなことは行政に任せるのではなくて、住民自らが参画して行動を起こすのがよいというのが、協働の考えなのかなと思う。そういった中で地方分権の進め方もあると思うが、そのためには、今回この計画も町民の役割と行政の役割が明確化されてきていると思う。しかし、町民というのは、行政はサービスをしてくれるところというように思っている人が非常に多い。そういった中で今なぜ協働なのかということをイラスト等を入れて分かりやすく、注釈なりを入れたりして、説明等が必要ではないかなと思う。

例えば、少子高齢化の発展の中で、福祉問題とか、環境問題とか、地域全体だけでは取り組んでいけないような、行政だけでは応えきれないような状況を理解していただく。また、行政は財政難という危機感を町民に理解していただく。そういうことをまず町民に理解していただいて、それで今後、町民の役割が達成されてくると思う。これから地区別で会合をもたれるかもし

れないが、そういう中でも何かチラシ等を作って、「分かりやすい協働とは」ということをしていかないと、計画倒れになってしまうのではないかと感じたので、事務局のご意見があればお聞かせ願いたいと思う。

会　長：　協働ということに関して、事務局の方で、今後の進め方、これに対する考え方、もしあったらどうぞ。

事務局：　今、お話のあった新聞記事については私の方も読ませていただいた。ご指摘のあったように今の段階、状況では、行政から生まれた言葉というか、そういった感じの位置づけなのかなと思う。実際、昔では道普請など住民がやってきたことを、現在では行政が担ってきている。そういったものを、全く昔に戻る訳ではないが、実際は、ある程度皆さんがやってきていただいたことをもう一度やるんですよというところもあると思う。おっしゃるように、なかなか言葉自体が、漢字自体が、新しい造語みたいなものであるので、今ご指摘があったように、理解が難しい部分もある。そういった中で理解していただくことが大事なので、出来るだけ分かりやすく表現していきたいと思う。と同時に、先ほどご指摘があったが、実際には、とにかくやってみることではないかなと思う。何かやっていって、行政と町民とが、何かの課題に向かってスタートが出来れば、これが協働なんだよ、逆に身をもって体験していただけるのかなと思う。ということもあると思うので、両面をもって分かりやすく表現していくのと同時に､行政からということもあるでしょうが、住民がやっている取組等を取り上げて、一緒にやっていくとか、実際に動きだしていくこと、これが大切ではないかと考えている。

会　長：　また、今後、この審議会で議論したものについて、「町長と語る会」を通じて、町民にも説明するという機会を考えているということであるから、その辺の中で、協働というような意味について、是非、町民の方々に理解をしてもらうような機会をつくってもらいたいと思う。

委　員：　今のことと関連してであるが、１つの例として、文化芸術大学の先生方のご協力をいただきながら、進めている「町並みと蔵展」など、これも協働というもののひとつと思うが､今の時点での状況等をお聞かせ願えればと思う。

会　長：　具体的な実例があればということだと思うが、今、実際に委員がやられている「町並みと蔵展」ということで、委員の方から状況についてなど、お話いただければと思うが…。

委　員：　「町並みと蔵展」という形で、町の後援、それから観光協会、商工会、農協さんの後援をいただき、今回で３回目ということになった。昨年の１２月

の３、４日、４月の１，２日と開催してきて、今回、「次郎柿のある風景」ということで皆様方にご協力いただけるように、今お願いしているところである。原木保存会、町の教育委員会のご協力もあって、原木のそばに顕彰碑、立派なものができたので、森町にある次郎柿の原木は、森町の人でさえ知らない人がいるが、県下、日本全国に誇れる、世界に誇れる柿であるので、今回「次郎柿のある風景」ということでいきたいなということで、お願いにまわっている。

参加者は、最初、何をしていいのか分からないという意見が多くあった訳だが、今回、今まで参加をしてくれなかった人たちも、「いいよ、家使って」ということで、今までシャッターが閉まっていたところも、使ってという形で、ずいぶん多くなってきた。そういうことで、出展者も今回は約50店くらい、軒先を借りてやる人達を含めると約65から70近い人達が参加をしてくれるのではないかと思う。川口先生にもご指導いただいているが、我々、地元の人間というのは、いつも見慣れていることもあり、この町並みの良さがわからない。前回の４月の時に「桜と天宮神社の舞楽」をテーマにしてやった訳だが、その時に掛川で人力車をひいている人達がいる。その人達にお願いして、町の中を人力車をひいてもらった訳だが、今回、その人力車の人達が、今回は頼まなくても、「逆にやらせてください」ということで話があった。「何でですか」と聞くと、「森の町というのは、ものすごく風情があっていいんだ、自分が車をひいていてこんなに気分がいいところはないし、お客さんを乗せていても、ほんとに気分がいいんだ」ということで、むしろ外部の人達の方が、森町の良さというものをよく知ってくれているという感じがする。

そういった点については、まだまだ土蔵とか蔵があるので、そういうものを含めた形の中で「町並みと蔵展」ということでやらせていただきたいと考えている。川口先生、アドバイスというか補足ということで何かあったら…

委　員：　この総合計画基本計画の第１章、第１楽章が歴史・文化で、第２が太田川、第３が第二東名で、第４がまちなか、第５が人づくりということで、基本的には森町の人が自信を持っていただいて、やっていくということが大事であると思う。先ほどの協働ということに付け加えていうと、民間の人がやる場合、行政がやる場合、業者がやる場合などがあると思うが、やはり森町が外に向かってどうやって情報発信をしていくかが大事であると思う。この総合計画には、大変すばらしい資源があるんだということで、それを活かして、いろんな展開をしていく。先ほど言われたように、まちづくり委員会があって、いろんな地域から出ている。そういう方々が、いろんな形でやってみま

しょうということで、そういう考え方に相通じているのではないかと思う。

そういう意味では、この「町並みと蔵展」は、とりあえずやってみましょうという形で、私どももお手伝いしている。大変素晴らしい価値があって、実際、古い町並みというのは、静岡県下では、まとまったものがない。伝統建築物保存地域というのが１つも無いのは、静岡県だけである。このままいくと、森町でも無くなってしまう。そういう意味では、一番わかりやすいのは、よそから来た人が、あなたの町は素晴らしいねといってくれるのが、重要な動機というか、モチベーションになるのではないかと思う。私どもは、ただの応援歌なので、こういう形で、森町が一生懸命やってくれるのがよい。繰り返しになるが、先ほどおっしゃったように、いろんなところでこういった活動が出てくればいいと思う。

会　長：　早速、活動の状況などを教えていただいたが、もし、具体的にこんなこともあればということで、皆さんからご意見をいただきたいと思うが…。

森町のインターチェンジができることによる、周辺の土地利用の検討についても、この計画の中にしっかりと位置づけがなされている。また、スマートインターチェンジについても、森町を発信するためには、効果があると思う。そんなことで、是非とも、「町並みと蔵展」ということで、民から動き出したと思うが、こういうものをだんだん広めていただければいいと思う。そんな感じを受ける。他にいかがでしょうか。

委　員：　今、情報発信の話がでたので、申し上げたい。実は、商工会の方で情報委員会というものがあり、そこが中心となってポータルサイト「ええら森町」というものを作っている。まだまだこれから充実させていかなくてはいけないが、その中に森町ブログ村というのがある。今、ブログの中では、森町のいいところがあったら、みんなでやろうよということで、ブログは、個人のＰＲする場であり、日記的なものであるが、例えば、いろんなイベントがあったら、そういったものを載せていったりとか、そういったことが、森町の中でも結構、やってくれる人が増えてきている。こういうことがあるよということで、パソコンを扱っている方々は、見ていただけると、あっ、自分もやってみようかなと思うと思う。本当に身近にあったことを、ポンと載せるというだけである。たまたま、昨日、個人的に「御命講」というお寺のお祭りがあって行ってきた。今朝になって、そんな記事がどこかのブログに出ていないかなと思って、ちょっと見てみたら、森じゃない人が「森のブログ村に来たらそういう話を聞いて、帰りに寄ってみなさいよと言われて、寄ってみた」という記事を載せてくれてあった。そういったものが広まってくると、

意外とおもしろいものになるのではないかと思う。できればそういったブログ村、森のがぁんこやでやっているので、委員の皆さんの中で、ちょっと覗いてみようかなという人があったら、是非、覗いていただいて、それぞれの森の情報発信ということで、参加していただけると、嬉しいなという気がする。

委　員：　先ほど、事務局の方から、説明があって、冒頭の「新しい森町のために」ということで町民一人ひとりへ呼びかけるようなページがあったと思うが、今お聞きして、この総合計画が一人ひとりにわたった時に、この中のものをアレンジして、自分たちや、自分たちの町内会でこういうことをやろうという動きや、また学校なんかで、この計画文に書かれていることが、形として出てくるといいなと思う。是非、そういう惹きつけを私たちもやっていきたいと思う。

会　長：　是非、具体的に進めていただきたいと思う。

委　員：　今の序論の部分の「新しい森町のために」のＰ１の文章であるが、この３段落目の「森町が町民のために何をしてくれるのかではなく、町民が森町に何ができるかが大切となります。」というところが、これを協働ということの説明として、もっともっとかみ砕いたような表現で載せたほうがいいのではないかと思う。前回、協働についてもう少し、説明が必要ではないかという意見を言わせていただいて、これに対してこういうことを加えていただいた訳だが、もっともっと行政側から町民の皆さんに、お願いをするというか、もう少し歩み寄ったような表現がいいのではないかと思う。

　それと、細かいことであるが、例えば、「より自立したまち」、ひらがなで「まち」という表現をする場合と「森町」という場合、それから漢字で「町」１字で表現する場合がある。その３つの表現の仕方が出てくるが、それらをどのように、何か意図的に使い分けているのか、その辺のところを事務局の方からご説明をいただきたいと思う。

事務局：　まず、１つ目のご指摘であるが、「森町が町民に何をしてくれるのかではなく、町民が森町に何ができるかが大切となります」というところであるが、ご指摘はもう少しかみ砕いた表現というか、行政が歩み寄った表現でということだったと思うが、ここについては、あまり長い文章でもということもあって、いかに端的に、わかっていただくかというところで、苦労しているところではある。もう少し詳しくということでいいでしょうか。なかなか量があると、読むのをやめてしまう人もいるので、多少難しいところかなと思う。

もう一つは、森町という場合は、固有名詞なので「森町」ということで漢字で表現している。「より自立したまち」という場合は、まちづくりという意味の「まち」、要は自分により近いものというか、そういったものを表現するつもりで、ひらがなを使っているが、一度、見直しさせていただいて、使い方の整理をさせていただきたいと思う。

会　長：　協働の定義づけというのは、難しいと思うが、ご検討いただきたいと思う。

委　員：　関連して、今のところを事務局の方でお考えいただけるということなので発言させていただく。この、協働を表現した「森町が町民のために何をしてくれるのかではなく、町民が森町のために何ができるかが大切です。」というところは、やはり誤解を招いてはいけないと思う。これだけを読むと協働ではないのではと思ってしまう。町民が何をするのかということと同時に、こういうことで町が厳しくて、しかし、こういうことに対しては行政も支援をしていきますよということをきちっとここに書かれていて、協働の説明になると思う。協働とは何かという話が先ほどからあるが、「町並みと蔵展」、これは、非常に分かりやすい協働の形だと思う。何故かというと、ここに名義だけかもしれないが、後援なのか、町がどういう支援をしているのか分からないが、「森町」ということが載っていることが、協働のひとつの形だと思う。だから、こういう例を、こういうジャンルについては言っていってはどうかと思う。

それから、これはちょっと離れるが、何か物事をおこそうという時に、まず、やってみようじゃないかという話だと思うが、まったくその通りだと思う。総体的に行政のやることに限らないが、プラン、ドゥ、までは大体いく。Ｓee（チェック）でよく見直していくということ、つまり定期的に見直していくような、例えば「町並みと蔵展」も５回、10回とやっていくと、定着していくと思うし、もう一回見直して、また戻るという、そういうことを繰り返すという、そういう癖をつけるという、そういうリードをしていく。

そして、協働の仕組みの中にどんどん入れていくということだと思う。当然まず、起こすということをやらなければ何も生まれない訳であるが、そういうリードをこの総合計画で実施していく、まぁ、これがいずれ承認されて、形となっていった時に、同時並行で、いわゆるお手本みたいなものが、分かりやすくあれば、協働の意味にしろなんにしろ、非常に理解が進みやすいのではないかと思う。

委　員：　「森町が町民のために何をしてくれるのではなく、町民が森町のために何ができるか」というのは、有名なケネディが大統領の就任演説で、それをも

じっていると思うが、「あなたの国家があなたのために何をしてくれるかではなく、あなたがあなたの国家のために何ができるか」という有名なフレーズであるので、一般的にそういうことが分かれば、これは、アメリカ民主主義がどうこうということではなくて、森町におけるこれからのまちづくりというか、そういう町民と行政のあり方といった時に、私はこれでいいのではないかと思う。人が作ったというのではなく、もじったということが分かるの人が客観的に多いのであれば、もし、分からない人が多いのであれば、有名なケネディの演説を入れるとか、これは、森町がこれからどうやってこれからの森町を作り上げるかという、精神的なことを謳っているのではないかという風に私はとることが出来ると思う。

もう一つ、協働というのは、難しく考えないで、正に字のとおり協力して働くということだと思う。分かりやすい例をひとつあげると、静岡市が大道芸でもって、全国、世界で、大道芸ワールドカップということで、札幌のよさこいと同様に大イベントとなっている。これを作るとき、たまたま、静岡市の総合計画、第６次総の、天野進吾さんが市長の時に、小嶋さんの前であるが、私、実は第６次総と第７次総の10年間、20年間の計画策定のお手伝いをさせていただいた。当初は、大道芸も天野さんがあまりやる気がなかったのかどうか知らないが、住民の一部分が、春は静岡まつりということで、大イベントがあったのだが、秋はなかったので、私たちがやるということで、15年前であるが、行政の支援ということで200万円くらいつけたか、まあ、やってみたらという程度であった。すごく印象に残っていることであるが、それから、３年後くらいして、実は名古屋に、商業活性化ということで視察にいった時に、大須というところをご存じだと思うが、大須観音がある、そこにいった時に、「静岡市も大道芸をやっているかもしれないが、我々の方が遙かに早くからやっているんだということで、静岡市より３年くらい早くやっていて、大道芸は先輩格だ」と言う。そのとおりだと思う。しかし、今現在をみると、大須の大道芸というのは、ほとんど聞かなくて、静岡が全国的なものになっている。歴史的には、大須の方が遙かに早いと思うが、このとき私が思ったのは、大須が一番自慢したのは、実は静岡県の関係で視察にいったが、「住民主体でやっていて、行政から一銭もお金をもらっていない」ということだった。確かにこれは、大道芸に来た人も、家に泊めたりしていたという。ところが、静岡市は、その点では、民間のボランティアもやったが、行政がずっとお金を出し続けた。そういう意味では大須が駄目になったのは、財源の問題がある。静岡市が世界の大道芸ワールドカップになれたのは、賞金などをかなり出したので、世界から演者というか、一流のパフォー

マーが来た。例えば、１等賞に100万円という賞金をだしたり、民間では、１等賞に100万円などなかなか出せない。これをみていて、行政と民間がタイアップしたから今日の大規模な静岡市を代表するようなイベントになってきたと思う。まちをあげてというか、市をあげて育てるんだというようなことをやるというのが、協働の典型的なものかなと思う。その中で、大道芸がうまくいったのは、ボランティアで多くの人が町をあげてその期間だけ、無償で、いろんなところから来た人への、エンターテイメントとか、小さな大道芸人になって道案内をするとか、全体でもって、初めは中心部だけであったが、今は広がって、合併もあって、今年あたりは、旧清水市のエスパルスドリームプラザでもやるという。大勢の住民をどうやって巻きこんでいくかが大事である。

だから私もこの協働というものをわかりやすく言えば、ひとつは、民と官であるならば、事業を民と官が持っているものを出し合う。お互いに補ってやっていくというのが、分かりやすい協働の道なのかなと思う。大道芸の話を出したが、私はそう思っている。

会　長：　やはり、協働という意味を町民にしっかりと理解していただけるようなものにしなくてはいけないと思う。

委　員：　もう、諮問がなされて、まもなく答申という中で、時間的な、タイムリミットというものがきていると思うが、委員それぞれの意見をなるべく盛り込みたいということで、事務局の努力も称えたいと思うが、私が委員として参画させていただいて、ひとつ反省があるとすると、この前の会合の時に、確認したところ、５つの視点からまちづくりの方向ということで、「歴史・文化」から始まり、「人づくり」までの５項目ということだが、やはり資源という点で見ていっても、それと地域の、森町の力という意味からいっても、産業という視点がないというのは、個別の中では、産業に通じることが新たな力になるということは入ってきているが、ちょっとこれ、経済関係ももう少し入れないとよくなかったのかなと思う。お茶もあれば、大きく育っているレタスもある。いろんなことが地域生産者の努力とあくなき挑戦で新しいものが育ち始めているという観点からすると、ちょっと見落としたなという思いがある。それから、確認をさせていただくが、実施計画というのは、どういう形でこれから次なる計画として示されていくのか。その点をちょっとイメージさせていただきたい。

事務局：　実施計画については、今後、主に各論に出てくる主要事業等整理するような形で、実際には、例えば何年度からとか、そういったものを整理していく

ことになろうかとは思う。今後の進め方等もあるので、そういったことを踏まえて整理をしていく段階にきつつあるのかなと思う。

委　員：　基本計画で、主要事業が示され、それを具体化していく実施計画が主要事業を中心として出てくるという理解でいい訳ですね。私は、基本構想から基本計画、実施計画の連動性というものをちょっと注意して見ている訳であるが、あとで、この視点だけお伝えするので、それぞれ事務局の方で確認をいただきたいが、総論のところで言っている目標、目標とその後に出てくる町民の役割、行政の役割というのがあるが、それと、この主要事業というものを設けた各項目の連動が、うまくつながりあっているのかどうかという感覚をちょっと、事務局として確認をしていただきたい。あくまで流れできているはずなので、そういう連携がなくてはいけないと思う。そこまで私、ちょっと見極めていないので、確認をしていただきたいと思う。

それから、主要事業というのは、これが基本計画の目玉になってくると思うが、ここに90％のエキスがあると思う。これからやっていく事業ということで、基本計画を形づくっている内容だと思う。事務局の方で、以前、説明があったが、各課で綿密に調べあげていただいて、やっていかなくてはならないことを中心に主要事業の中に入れ込んできているという手順をお示しいただいた。やはり項目的には、そのようにちょっとなりすぎているなという風に感じている。協働を誘い出すという観点からすると、行政主体の事業になっていて、ちょっと協働を誘導する想いを謳いながら、どこに協働の姿をみたらいいのかという、ちょっと分かりにくい、ちょっと難しいことを言って申し訳ないが、勝手に言わせていただくとそのような感触を受けた。その中にも、例えば、Ｐ18の主要事業のところに出てくる、「社会福祉協議会との協力、連携の促進」こういうものは主要事業ではなく、手段だと思えてならない。それとか、Ｐ33に出てくる「周智防犯協会との連携」であるとか、例えばそういうようなものを、主要事業という範疇に入るのかどうかと思う。もう少し、そういう意味では、主要事業を精査する必要があるのかなと思う。まあ、だからと言って、これからやっていく10年間の中で、協働をイメージする事業を今ここで作り上げるという難しさを逆に承知をして発言しているつもりではあるが、そこのところをなんかうまく、うまく表現することができるようなことがあったらそれこそ蔵展ではないが、あるいは次郎柿の振興なんかもそうであるが、非常に町民が、やれば響くというか、膨らんでくるというか、楽しみをもってやれるという雰囲気を感じ取ってもらえる何かが、この基本計画にイメージされるとよいと思う。振り返ってみると、三倉の夢

街道の設置をしていくときにも、これは行政が山間地域の振興策を何か欲しいといって何かやる必要があるといった時に、提案をした訳であるが、それを実施にむけて、道作りをしたり、なになにしたりというのは、かなり住民が参加していて、サジェスチョンは行政だったが、実施には住民がかなり入り込んだという協働のひとつのスタイルができていたと思う。そういう点では、蔵展であるとか、次郎柿であるとか、民間で発して民間中心でやって、行政が後援するというのとは、またちょっと違った協働スタイルであるので、いろんな形で期待感をもてるような、イメージできるといいなと基本計画の中に期待してしまう。私の言い過ぎかもしれないが、勝手を言って申し訳ない。感じたまま言わせて頂いた。

会　長：　多岐にわたってのご意見であったが、どうでしょう…

委　員：　第３者的に言わせていただくと、今のご意見は理想論だと思う。行政の主要事業というのは、おっしゃるとおり、行政主導のメニューが多い。その根底には、本当は、例えばＰ18、19で、今のご意見と違った解釈をするならば、例えば、介護ボランティアというものがあって、地域によって行政によらなくて、地域ボランティアでうまくいっているとする。そういう地域があれば、例えばＡ地区でやっていて、Ｂ地区でもやってもらえるといいねというものがあれば、今ご指摘のように、理想的な協働の姿であると思う。ところが、残念ながら、本当にあるのかどうかわからないが、無いんではなかろうかと思うので、そういう先進的なものが、そういうものが無ければ、これから作りましょうよというのがこの事業だと解釈していただいて、確かにご指摘のように、行政の色合いが強いが、今回の総合計画、10年間の長い過程のなかで、介護ボランティアというものが、森町のなかで生まれるというか、生まれるように育てるというか、そういうことがあると、素晴らしいではないかという理想を謳ったというようにご解釈いただくしかないのかなと思う。そういう点でよろしくお願いしたいと思う。事務局にかわって発言しているようであるが…。そうでもないとこれ書けないのではないかと思うので、よろしくお願いしたいと思う、というのが、事務局の想いだと思う。委員が言われたことは、全くそのとおりだと思う。そのとおり書くと、書くものがなくなってしまうのではないかと思う。突き詰めていくと…。

委　員：　反論でもなんでもなくて、川口先生の言われることも、重々、そのとおりであって、じゃあ、自分が事務局でやれと言われれば、難しいと正直思う。思うのは、かなりの期待感をもって委員の皆さんは、基本計画を作るのに参画をしてきていると思う。今までの基本計画と違うものを作りたいという想

いがどこかにあったと思う。それで、考えてみると、住民の皆さんにこれを手渡して読んでいただいた時に、何かやりたいねって感じる、そこのところを思うと、ちょっと行政主体の項目が並んでしまったという感じがちょっと正直持ってしまったので、それだけ発言させていただいた。

会　長：　主要事業の中に、具体的な事業をあげるということは、財政も伴うし、大変難しいことだと思う。一番わかりやすいのは「あれをやります、これをやります」ということで、言い切ってしまうのが一番だと思うが、なかなかそこが一番、計画の中では難しいところなのかなと思う。

他に委員の皆さんから何でも結構なので…

委　員：　先ほどの発言との関連で、産業の振興という中で、気になっていたが、Ｐ37で出てくる、「商工業の振興」というところで、商工会長もいらっしゃるので大変恐縮であるが、ちょっと、森町これでいいのかなという感じがする。Ｐ36の次郎柿ワインとか、何かとか、この「農林業の振興」の中に入っているが、これは今現在、やっていただいているのは、商工会が中心となって進めてきているし、そういう点から考えていくと、少し考えなくてはいけないのではないか。森町の一番大きな産業は、茶商組合さん方の商業集荷額等を見ても、大きなものがある。長い歴史の中にあって、大きな産業であり、この森町のお茶というのは、生産地としての機能が、この森のお茶だけではなく、この近在のお茶すべてを集めてきているというそういう力も持っている。そういうことから、もう一度、産業振興の中で、農業部門、商業部門というのを、私はもう少し見直しをしてはどうかと思う。今意見を聞いたので、私も感じていたので、そんな形のことがなんとかならないかなと感じている。

それから、あとは細かいことであるが、だいぶ整理されてきているなと思うが、前回の時にも少し発言させて頂いた。Ｐ８、２番の(2)の「成果重視の行財政運営」という中で、大分、文言も整理されてきているが、もう一度、くどい発言になるが、成果重視という行財政運営という形になっているが、「行政評価システムの確立を図り」とある。ここにあっていいのかどうか、あるべきなのかどうか。町民に対して出していった時に、むしろ本当に、創意工夫をして、適切な重点的な事業を進めるんだよということに、この中を見ていると、だんだん変わってきていると思うので、もう少しその辺を整理してみるといいのかなと思う。

それから、Ｐ12、第１節で、「子どもを安心して生み育てることのできるまちづくり」があって、現況と課題、文言が書かれていて、グラフが出てきているが、グラフの中で、合計特殊出生率の推移というのが出てきている。

この合計特殊出生率の推移というものが、あえてここで必要なのか、やはり意図的にここで必要なのか、質問も含めて、どうかなと思う。

会　長：　３点ほど出たが、ご検討をということで、最後の合計特殊出生率の推移について、意図的な何かがあるかということであるが、事務局、いかがか。

事務局：　合計特殊出生率ということで、グラフを出しているのは、結局、少子化の問題がある。基本構想の時に、各地区にお邪魔した時も、子どもの声が聞こえなくなったという話をよく聞く。そういった中で現状を表すものとして、出生数、年少人口割合の推移とともに、要は、子どもを産む数が少なくなってきているのではないかという現状を表すために合計特殊出生率ということで資料をここにあげさせていただいているところである。

委　員：　出生数とか年少人口割合の推移というのは、これはここでいいと思うが、合計特殊出生率というのは、あえてここで必要なのか、今言った現状と課題を含めた森町の場合も含めて、もう少し適切なものが入ってもいいのではないかと思ったので、こんな発言をさせていただいた。

会　長：　先ほど、産業の振興ということで意見があったが、主要事業等なにか提案等があったら…

委　員：　先ほど申しあげたとおり、次郎柿ワイン等は商工会が中心となってここまで進めてきていただいているし、「お茶ごこち」とかも商品化をされてきている。商工会としての自発的な活動も前向きに取り組んできていただいているということで、その辺をちょっと整理をしていただきながら、もう少しお茶の、茶商さんの、いわゆる森の集産地としての、そういうものをふくめた形の中で、ご検討いただけたらと思う。

事務局：　お茶の商業的な部分もあるというご指摘だと思うので、農業としての役割とともに、そういったご指摘もあると思うので、次郎柿についても、そういった取組もあるということから、その辺を少し踏まえて、検討していきたいと思う。

会　長：　他にいかがか。

委　員：　産業の、特に商工業の、商業の衰退が、皆さんのご存じのとおり、どんどん進んでいるということで、非常に残念に思う。産業界の窓口としての商工会活動をみると、最近は特に、県連合会、国も、商工会が自分で生きていくための営利事業もどんどんやれという指導に変わってきている。かつては、儲け話などいかんということであったが、最近はどんどんやって財源をどん

どん稼げということになっている。

まあ、そういう国家体制、社会体制になってきているんだなということを自覚させられている訳だが、当森町の場合においては、現在のところ、単独の道を選んだ、町民の意思として、商工会は今のところ単独でいく方向で歩き出している訳だが、周辺はどうなのかと伺っていると、環境が変わりつつある。今、衰退の原因というのは、社会情勢等皆さんご存じのとおりであると思うが、しかし、その中にあって、元気よく頑張っている市町村があるということも事実である。そういう実例を見聞きすると、やはり協働ということに通ずる言葉であるが、ある町においては、町おこしの原点を担っているのは、町のリーダーの皆さん、やはりやる気のある若手の官民の立場のリーダーの皆さんである。先般も小布施の冊子を見たが、小布施町がなぜ、あれほど有名になってきたかというと、やはりそこの町長自らが考えを出し、身銭を切っても町のためにという考えで投資をしてくれる。そしてその友人も参加する。また、その友人もということで、いい人間関係、必死になって生きていこう、まちづくりをしようという有力なメンバーが集まって、あれだけにどんどん変わって、行政を動かすことができた。そこから頭脳集団もどんどん応援してくる。そういう実態をみると、我々の町もやればできるという気がしてならない。それを手をこまねいていると、どんどん潰されていくということになりかねない。まあ、ひとつ「町並みと蔵展」にしても、まずやってみようということで動き出した町の方々には敬意を表したいし、同時にそういうことをやることによって、町民みんなが応援歌を歌ってあげたいなと思う。個人個人の営業の応援をするのではなく、まちづくりそのものに努力をしているその価値に対して、あるいは意思に対して、行政がもっともっと前に出て、あれは民間の人達がやることだから、関係ないというような態度、もしそういうものがあるとしたら、発展もなにも無い。是非、金を出すのではなく、知恵を出して欲しい。応援をしてもらう。応援団、サポーター。行政が一体となってそういうことをしていただくということが私は大事だと思う。経済団体でも、商工会という組織を筆頭に、応援をしていく、じゃあそれに伴う、農協さんも建設業界さんもみんなが、協力をして、活動に対して充実していくように協力をする。こういうことは、やがて自分達の事業、地域全体のために効果が出てくる時に、結果として自らも貢献することができる。強いては、町民も喜んでくれる。外部からの人達も観光産業に通じることであるので、一生懸命であるという姿を見せることによって、なお、いろんなイベント、祭事の時にもきてくれるであろうと思う。良い方向に回転し始めると思う。そのきっかけに第８次の総合計画が、産業の振興という

のは本当に大事な時にきているなと思う。行政の方としては、産業課であるから、産業課長さんは何を考え、努力すべきかということを、今までの行政マンとしての仕事もあるが、それは職員、部下にある程度やってもらって、知恵を出させてもらって、新たな発想のもとに外へ打って出て、産業の振興、どこにあるのか、何が必要なのか、そういう行動を今まで以上にやって欲しいと思う。特に産業観光については、デスクに座っていたのでは話にはならない。外にどんどん出ていって、産業、観光産業につながるネタを探し歩く、そういうような姿勢で臨んでいただいて、そういう芽生えが出たら、応援歌を歌っていただくというような姿勢で是非お願いしたいと思う。私の考えはそんなところである。

会　長：　他にございませんか。

だいぶ時間も経過した。特に他にご意見がないようなので、次に進みたいと思う。それでは、本日いろいろご意見を出していただいたが、そのご意見の中で整理のできるものについては、調整をしていただいて、また出していただきたいと思う。

また、先ほど挨拶でも申し上げたが、町長と語る会を通じて、皆さんに総合計画の内容等々について、説明の機会をもつという予定になっているので、是非、協働という意味を町民にご理解を深めていただくということを私の方からお願いしたいと思う。

次回は、12月５日ということで予定をしているが、後ほど事務局の方から確認をしていただくが、特にないようでしたら終わりたいと思う。

（２）その他について

事務局：　次回12月５日（火）午後２時から町民生活センター集会室にて開催を予定している。答申の素案という形まで整理していただければと考えている。

５　閉　会

（以上）